日本幼稚園創設功労者

清節に生きる

豊田芙雄子先生

安省　三

燃えあがる鋼の意志

豊田芙雄子先生の風貌に接した人なら、先生はどのような人であるかをはっきりと理解するであろう。私は幸にも先生の住まれた近くに居住したため、若い頃遠くから先生の姿を見ていたので、今さらのようにその姿を思い出すのである。まなじりのつりあがった鋭い眼光は人を射るの感があり、きりりと結んだ口もとには意志の強さがしのばれ、容姿はまことに端正で、かって弘道館で徳富蘇峯氏と面接された時の正しいいずまいには、先生の尊容に接しただけで身のしまる思いがした。私は、先生が老境にあってよく人力車に身をまかせ、わき見もせず車を走らせる姿をながめたものであった。

冬子（芙雄子と改める前の名）先生は、豊田小太郎に嫁して以来、夫と生活をともにした期間はまことに短かかった。四年という年月はあっても、その間夫が国事に奔走する激しさのために、同居の夫婦生活というものはごく僅かで、夫は江戸に、水戸に、京都にそれこそ東奔西走席の温まる暇のない激しい活動の時であった。それは攘夷と開港のすさまじい論争の時代でもあり、当時水戸藩がそれだけ重要な位置にあった事情によるのであって、小太郎は天下の形勢が容易ならぬことを察し、世界の大勢をも深く洞察して、水戸藩の藩政改革と開港問題のために斡旋奔走をした。この事実を理解しただけでも只ならぬ小太郎の身辺への圧迫を認めることができる。はたせるかな小太郎は京都堀川で刺客のために命を落した。

水戸に残る豊田芙雄子の一家はその頃悲惨な有為転変に見まわれ、つぎつぎに起る一家の不幸はとどまるところを知らず、豊田家に生き残るもの芙雄子ただ一人ということになってしまった。先生は明けくれに孤独の淋しさと、人生の苦痛とを味わいつくし、孤独の生活の中に思いしのばれるものは、夫小太郎が国事に奔走する際いい残した「強く生きよ」のことばであった。先生は夫小太郎の強い生き方を思い、いかなる人生の苦痛や困難にあっても、自己を生かす道は強く生きぬくことであると信じ、以来燃ゆる情熱をたぎらせ前途に光明をみつめながら、夫小太郎の形見の品にかしずきつつ、報国の念をうけて生涯を強く生きぬくのであった。その雄々し

い姿はけだかく、そして神々しささえ覚えるものであった。

そのために以来先生は和漢の書でひもとかざるはなく、ひたすらに士魂を磨き、人としての生きかたについて思索をねり、夫の遺志をつぎ髪を切って学者になろうと思い、教育者になって人材を育成し、日本文化の向上に力をつくそうかとも悩み、読書千遍、歌者万営という祖父幽谷の暗誦を重んずる教育思想も受け、古今集などはそらんじていた。

冬子の母が藤田雪子で有名な藤田東湖の妹である。武田彦右衛門に嫁した幾子も、久木直次郎に嫁したおかのも叔母である。これらのすぐれた人たちにとりまかれて生長した冬子は見識も人にすぐれ、波瀾多い世の空気を吸い、生涯もまた波瀾多い生活を送り、その波瀾多い生活の中に毅然として清節をもって強く生き抜いたのであった。

妙齢にして孤独の生活を続ける時に、加藤木正之氏から再婚を懇望された。少し後にはなるが朝鮮全権公使大島圭介氏からも懇望された。仙石貢氏などもたびたび芙雄子女史の所へ歌かるたをするために来ているのを見ると、その頃の芙雄子女史の身辺にはいろいろな問題があったように見られもする。しかし、その間にあって、女の生き方はどうあるべきかをかたく心に秘めて世のきよほうへんには決して動かなかった。この不退転の人生行路はいかなる威武をもっても、いかなる権威をもってもこれを屈することはできなかった。先生は俯仰して天地に愧じない境地に女の生き方を求めていた。その間ひたすらに読書研讃をつみ、懐に剣をたばさんで夜道を学者の家に走り、勉学と自己の向上にひたすら意を用いた。この人格のすぐれた意志の強い、識見の豊かな人材を見出した人こそ時の東京女子師範学校摂理中村敬宇氏で、女子教育の先覚者、日本屈指の教育家として先生を推薦したことによって、東京女子師範学校の開校式に先だって文部省から聘せられたのである。時に芙雄子は、三十三歳であった。

幼稚園保育手記

明治八年東京女子師範学校が設立される前に聘せられた先生は、最初読書教員という辞令を受けている。先生の履歴書を見ると教育の内容までがそれに裏書きされている。漢文と歴史と地理を受持って教えた。教科書というものもないし、資料もないので、歴史は先哲叢談を用いたし、地理は輿地誌略によったようで、教える自からが世界の広さに驚異の目を見張り知見をひろめるといった工合であったとのことである。

明治九年付属幼稚園が開設されることになった。開園するに当っては相当の準備が必要である。そこで芙雄子は開園一か月半ばかり前に付属幼稚園保姆兼務を申し付けられた。芙雄子は幼稚園開設の準備と、保育計画の一切を日本で最初になした人で、彼女はフレーベル直伝の人といわれる松野クララ女史（独逸人）について、フレーベルの保育法の研究に日に夜をついで努力をおしまなかったのである。

以来先生が明治二十年外遊されるまでの十二年間は、わが国に幼稚園教育の発展拡充をはかり、ことに園児保育ということのためには、恩物の研究からその用紙の製作、恩物の作りよう、音楽遊戯から楽譜の作曲に至るまですべては保母の手によって作らねばならぬ

苦心があった。加えて全国より集まる保母の養成ということや、幼稚園の拡充と強化のために関係各官庁への上書具申や、顕官高職との交際などに精力をそがれ、婦人の啓蒙などの仕事に日もまた足らぬ活躍を続けたのである。当時学習院には下田歌子女史、竹橋女学校に鳩山寿子女史などがあり、それぞれの立場で活躍されていた。豊田芙雄子女史はわが国幼稚園教育の創始者であるばかりではない。わが国女子教育の先覚者なのである。

また幼稚園保育についてフレーベルの保育法に専念研究されたが、後にはフレーベルが植物学者として植物の成長から幼児保育を研究したことにのみは満足せず、自からの識見によって思索や研究も行い、わが国民性にあった保育をとり入れるに至ったものも数多くあるようで、これらは先生の保育手記や、婦人に対する講演草稿などに徹して明かである。

利に走らず

鹿児島で幼稚園を創設したい要望から、先生は懇請をうけて鹿児島に赴いた。当時交通が不便で、海路船で行くか、陸路は駕籠による外はなかった。今ならアメリカへ行くより大騒ぎであったろう。旅費として五〇円を受けた。当時としては大金である。先生は私すべきでないとして養父天功の碑をこの金で建立した。鹿児島についてからは県令や有識者から厚遇を受けたが、先生の力とたのんでいた実兄力太郎は明治十年西南の役に戦死していたので、いとまあるたびに城山の墓に額ずいて淋しい心をなぐさめつつ日を送った。幼稚園については先生の思うままにできたので大胆にフレーベルの保育法そのままを思いきって行ったようである。ただ鹿児島の人とことばが通じないために苦労が多かったようである。

芙雄子先生は経済に対して考え方が徹底していた。現在豊田家に残る新彦氏は祖母芙雄子について、私が、「大町桂月かの文に黄金にまよわず」という一節を読んだ時、「そこは大事だぞしかとおぼえよ」とはげまされたといっている。水戸の女学校に舎官長をしていた頃、商人からの贈りものは一切受けず、留守中に持参したものは家族の手で返却したことも、事は小なりといえども平常人のやれないことをてきぱきとやってのける態度には、汚職や横領が新聞記事となる昨今の世相を思うごとに感概の新たなるをおぼえる。

第二次世界大戦の勃発した頃、先生は恩給のみによるささやかな生活を水戸市田見小路におくっていた。先生は家財道具を売払って金を工面して献金した。先生は正しいと思うことは必ずつらぬきとおすという性格である。夫小太郎の精神もまたこれであった。先生は亡夫小太郎を生涯のはんりょとして節をかえない意志の強さと、自己を持することまことにきびしく、自からは豪傑としては豪胆さがないから清傑というべきかとユーモアまじりの述懐をのべている。

日常生活

先生の生涯は苦闘の人生であったが、苦闘の生活の中にユーモアを失わず、ゆとりのある生涯が見られる。母の雪子もそうであったし、祖母の梅子はさらにユーモアの豊かな人であった。八十八歳米寿祝の即興にも

めいどよりもしも使が来たならば
　九十九までは留守とことわれ
留守といはばまた来るものと思ふべし
　いつそ行かぬとことわってやれ

ともいい、いつまでも元気は衰えなかった。このようであるから普通人よりは長命であった。この長命についても、長命の支え方に卓越した識見をもって自己を支配していた。先生は常に飲食のために腹をこわすというようなことは決してしなかった。人間は健康を保ち、健康で豊かな経験を体得してはじめて人間の力となると解釈し、生命を長ずることは命が惜しいのではない。人と生れた生甲斐は人間としてなすべきことがかぎりなくある。そのためには長命が必要であると信じたからであろう。

先生は活動的な人で一刻もあんかんとしない。根本正代議士（先生の夫小太郎に教えを受けた人）の兄が先生を訪うたことがあった。この二人の関係は相当深い間柄にあるはずであるが、面接数刻、話の最中に「わたしは今から講演会があるから君も行かないか」という時にはすでに靴をはいているという工合で、坐作進退はまことにきびきびしていた。座敷を歩く時肩で風を切るの風があって、寸暇もじっとしていないという気ぜはしいばあさんであったとは家族のもらす述懐である。

このようにきびきびしておりながらも半面はやさしい心の持主であった。芙雄子が宇都宮女学校で校風刷新のことを成しとげた時、井上馨侯から山口県三田尻に女学校を創立するについて、彼女の腕を借りたいと懇望された時、先生は飛び立つ思いであったが、しかし、一方水戸にある藤田の姉が困っているさまを見兼ね、姉一家のみとりのために一身の栄誉をすてて姉一家のために水戸に帰ったのであった。この美しい心情には頭のさがる思いがする。先生は常に猫を可愛がった。可憐なやつだと猫を愛したのもこうしたやさしい心情に所以するのではあるまいか。

水戸の田見小路に晩年を送った芙雄子の屋敷は彼女のものではなかった。三百坪に余る堂々たる邸宅は、芙雄子先生の生を終るまで無償で貸してくれた桑原家の温かい友愛であった。水戸藩にあった藤田、豊田、桑原家には友愛の涙ぐましい話題が数多くある。

芙雄子は九十六歳で生を終る数年前まで、朝は家族の誰よりも早く起き、厳冬にあっても桜の大樹のもとで、冷い井水に身を清め、田見小路に続く一望十里余にわたる関東の広野を眼下にながめ、浩然の気を養いつつ薙刀をもって身を鍛錬し、北側の縁に日光下しの北風を受けて片腕ぬいて髪をくしけずり、身だしなみを整えて神棚や祖先の霊にぬかずき、夫小太郎の形見にかしずかぬうちは、いかなる人にも逢わず、何物も口にしなかった生活は平常人のよくし得ることではなかった。

（水戸市立緑ヶ岡幼稚園長）

＊　＊　＊